

企画
部会

〜ご命日に聞く〜

その人を介して
仏さんに相對する

夫Aさん(71才)と妻Bさん(66才)は平成23年に父(92才)を、平成10年には中学卒業を間近にした長男(15才)を亡くされた。

11月10日が父の、3月12日が長男の祥月命日である。

Aさんの妹Cさん(69才)を交えてお話しを聞かせていただく。

― 今日11月10日。おじいちゃんの祥月命日をお迎えしています。おじいちゃんはどのような方でしたか。

A うちの父は生まれは大正だけれど、考えは明治の考え。男が一番という感じで。孫もやっぱり男が生まれた時はこの上ない喜びがあったんではないかと。病氣自体は「白血病」、骨髄性だったかな。余命三カ月って言われたんです。あれが6月だったよね、確か。ずっと入院してたんですけれども、途中でもう

「退院したい、退院したい」と執拗に言っていて。9月に入ってから退院してきて、ずっと家で療養していたんです。亡くなる当日は、すごくお天気の良い日です。その日の夜暗くなって、「トイレに行きたい。オシッコに行きたい」って言って。車椅子でトイレに行くと、「終わったかい」って聞いたたら、「終わったあ」って言って。そして、戸を開けて車椅子に乗せたくらいからちょっとおかしくなっちゃったんだよね。で、急いでベッドへ行って寝かしてあげたんですけれども、もうそれ位で意識がなくなつて。

― 病名はご本人も知っていたってことですよ。3カ月ということも知ってたんですか。

B バツチリ、病院の先生が本人を前にして言っていたの。

― 例えば、それを言われた時に

本人は…。

B 私の第一印象は、家に帰ってきたら、あのおじいちゃんがすごいハイテンションになってた。

A あの後、一週間位は結構…。やっぱりもう自分で、自分の考えの上いっちゃったんじゃないのかな。

B たぶんね、まだまだ生きようと思つてたんだと思うの。それが、いつになくハイテンションになっていて。こんなじいちゃん見たの初めてだなんていう印象は残ってる。

― 親が今そういう病気で3カ月ではないかと聞いた時はどうでしたか。

B 私、息子亡くなった時に家で死なせてやりたかったなと思つて。ずっと外泊は多かったんだけど、最後はやっぱり病院だったから。だから、おじいちゃんが病院が嫌で家に帰りたいと思つたら、それも良いなと思つた。

― おじいちゃんね、おばあちゃんと一緒ににお寺に来てくれてたというの、孫さんを亡くしてつていうことがきっかけで。

A まあ、家は浄土真宗、お東だつて、それは言つてたけれども。せいぜい、お盆の墓参りくらいで。

C 私もだから、「えっ、コロリ

と変わつて、お寺ばかり、またお寺行つて。えっ、冬のこんな時も。お正月の時に夜中に行くでしょう。大した若くもないのに、そんなことまでしなくていいのにな」とか思つてたことはあつたよ。

― おじいちゃん、おばあちゃんの姿がどう映つてました。

B おじいちゃんは、凝り出すつていたらおかしいけれど、始まつたら熱心だから。

A だから、書籍も結構ある。

C お母さんも言つてたよ、「お寺行かんかって言うけれども、眠たいし、寝たら怒るし」つて。それこそ、孫が亡くなったことをきつかけにお参りはしてたよね。だから、それまでとは全然違うから。よく行つてたから凄いなつて。

A だから、お寺のお参りに行つての説教を録音してきてるんだよね。そのテープがすごい量あつたよね。こんな菓子箱一つにビッシリとあつたから。

― 今、Aさんご自身がお寺に足を運んでくださるようになって、その時の父親の姿に対して何か思うことはありますか。

A 父親が亡くなってから、母親をお参りの時に連れて行つて。縁があつて役を引き受けたりして、お寺に行くことが多くなつ